TNVN network news

東京日本語ボランティア・ネットワーク

URL: https://www.tnvn.jp/　E-mail: office@tnvn.jp

2025 年 7月 31 日発行 No.125

目　次

TNVN2025 年度総会・懇親会報告 …… 1
登録日本語教員資格の今後とその問題点 …… 2
寄稿 法人化への道のり …… 3
紙上講座 日本語教育・支援　変わったものと変わらないもの 4,5
『きいてまねしてはなして-わたしたちが語る「20 のエピソード」-』の活用 6
Nice to Meet You しば日本語クラブ水曜クラス(港区)、奈良のボランティア日本語教室から(奈良市) 7
Column、編集後記 …… 8

TNVN ホームページ QR コード

TNVN2025年度総会・懇親会報告

《第３２回総会の報告》

２０２５年度の TNVN 定例総会が５月１８日(日)午後２時から「さぽうと２１会議室」にて開催されました。

２０２４年度の活動報告・決算報告・監査報告、規約改正、役員・運営委員人事、２０２５年度活動計画・予算の全ての議案が承認されました。

●２０２４年度活動報告

1. TNVN の機関紙である network news をオンライン化して年３回発行
2. １０月の講演会では文科省の北村祐人さんに地域における日本語教育を中心に講演いただいた。
3. 今年３月の研修会ではつながり創生財団の井上伸子さんに東京都多文化共生ポータルサイト(TIPS)の紹介をいただいた。
4. 初めてオンラインでの意見・情報交換会を開催。事前予約なしに会員が自由に参加できる形で開催し、参加者がそれぞれの活動状況や課題などを話し合った。

総会の様子

●年会費の改正(規約第１３条)

正会員と協力会員の年会費を減額した。この減額は、TNVN network news がオンライン配信となり、編集費・郵送料など大幅な費用削減が達成できたため。

●２０２５年度活動計画

今年度も電子版 TNVN network news の発行をすすめ、講演会・研修会・意見交換会を積極的に企画・実施していきます。

《懇親会の報告》

総会に引き続き、懇親会を実施しました。２つのグループに分かれ、途中メンバーを入れ替えながら、それぞれの団体の紹介と抱える問題の提起から今後の TNVN のあり方まで幅広い話題で活発に意見交換ができました。区によってはボランティア養成と交流に積極的なところもあると羨ましく思いながら聞いたり、ボランティア活動は基本楽しくなければ続かないというご意見に深く同感したりの８０分でした。また、コロナ後はオンライン会議が増え、対面での交流が減ったので、もっと対面での教室間の交流やイベントがあるとよいというご意見をいただきました。TNVN は会員団体を繋ぐ真のネットワークになる、という設立時のミッションに立ち返り、今後活動していきます。

(文責：山形、鈴木)

懇親会の様子

●２０２５年度人事

〈役員〉

代表: 鈴木 恵司<留任>　(渋谷区)
副代表: 山形 美保子<留任> (杉並区)
会計: 矢崎 理恵<留任> (品川区)
会計：岡田 美奈子<留任> (江東区)
監事: 西堀 孝文<新任> (八王子市)

〈運営委員〉

片岡 典子<留任> (江戸川区)
坂本 弘一<留任> (足立区)
天坊 千明<留任> (杉並区)
中村 三千子<留任> (千代田区)
中山 眞理子<留任> (中野区)
仁村 議子<留任> (品川区)

〈スタッフ〉

山内 眞理　(多摩市)
松川 彩子　(江東区)
大滝 敦史　(在宅:ＨＰ管理担当)

日本語教育機関認定法施行後の現状
～登録日本語教員資格の今後とその問題点～

NPO 法人『IWC 国際市民の会』
大塚祐子

私は現在、日本語教師として３ヶ所で活動しています。NPO法人『IWC国際市民の会』での「高校入試支援教室」、都立高校の外国人生徒対象の「日本語理解クラス」、留学生対象の「日本語学校」です。日本語学校に勤務することになったきっかけは2024年４月に施行された「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律（日本語教育機関認定法、以下「認定法」と称す）」にあります。この認定法で、法令に根拠のある資格制度として「認定日本語教育機関（以下「認定校」と称す）」と「認定日本語教育機関の教員（以下「登録日本語教員」と称す）」の創設が定められました。今回は登録日本語教員の資格と取得方法とその問題点を私自身の経験をもとに紹介させていただきます。

この認定法施行により、法務省告示機関である日本語学校（以下「告示校」と称す）は文科省認定の認定校に完全移行されます。そして認定校で日本語教育課程を担当するには、登録日本語教員資格が必須となりました。日本語教師初の国家資格です。現状、この資格は「認定校で働く日本語教師に求められるもの」ですが、国家資格を謳っている以上、今後、あらゆる場面で求められることは想像に難くありません。

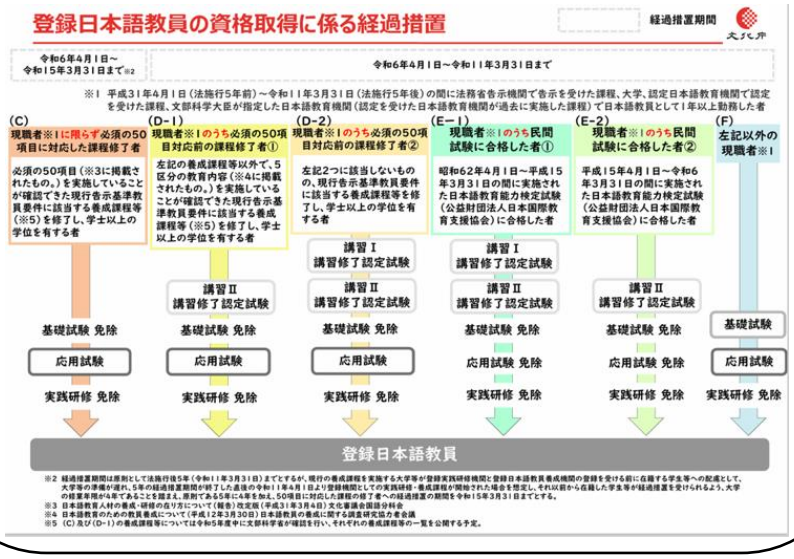
認定法では、現行の日本語教師に対して、それぞれの属性に応じた経過措置が設定されています（下記 URL 参照）。 私もこの経過措置を利用し、登録日本語教員の資格を取得することにしました。日本語教育能力検定試験に合格している私は、全ての試験と実践研修が免除となる E-2 ルートになります。しかし、条件として現職者であることが求められました。現職者とは、認定法施行前 5 年から施行後 5 年までの間に告示校に 1 年以上勤務した者を指します。文科省によると、この経過措置は告示校勤務の日本語教師のために設定したもので、それ以外で活動している日本語教師は経過措置の現職者に該当しない、とのことです。
私は2020年から日本語教師として活動していますが、それらの活動は現職者の対象にはならないのです。現職者の定義に忸怩たるものがあるものの、資格取得のため、告示校である日本語学校に勤務することにしました。

一方、文科省が作成した「登録日本語教員にどのような活躍が期待されるか」というPR動画では、活躍の場として「外国人人口が増えてきたA自治体、外国人の子どもを受け入れるB学校（以下、略）」などを例として挙げています。文科省は、登録日本語教員に告示校に留まらず幅広い場での活躍を期待しているのです。しかし、そのどれもが資格取得の条件である現職者の対象ではありません。地域や海外で教えている日本語教師は現職者に該当しないのです。これまでいろいろな場面で日本語教育を支えてきた先生方に対する救済措置が薄いのです。

このように登録日本語教員制度は様々な問題を孕んでいますが、すでに多くの場面で求められる資格になりつつあるのも事実です。そして、この資格を取得することで、いろいろな形で日本語教育に携わっておられる先生方の活動の場が、今後さらに広がっていくのではないかと思いました。複雑で若干わかりにくい経過措置システムですが、ここに紹介させていただきます。

ご参考までに文科省が規定した経過措置ルートを下記いたします。

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/93964001_03.pdf



法人化への道のり

一般社団法人 多摩市国際交流センター
理事長 加藤 晃章

当センター（TIC）は、１９９３年３月に市の主導で「民間ボランティア組織」として設立されました。その ５ 年前から２０名ほどの市民有志によって活動されていた、「多摩市国際友好クラブ」での諸活動が引き継がれ、「日本語講座」は「外国人相談委員会」として再出発しました。市内在住外国人の増加とともに、委員会の活動も活況を呈すと同時に、日本人が外国語を学ぶセミナーもスタートしました。また、友好クラブの時代からのバーベキュー大会、バザー、市内施設見学会などの交流イベントも活発に続けられ、交流事業部（各種交流活動）、広報部（広報誌の発行）、開発運営部（企画・開発）、生活支援部（外国人の生活相談）、ユース国際交流部（適応指導など）と組織も分化し、次第に体制も整っていきました。

TIC 発足当時の市内在住の外国人は、１,９００人程でしたがその後増加を続け、現在は３,７００人と倍増しています。TIC では聖蹟桜ケ丘、多摩センター、永山の３会場で計 ５ クラスを稼働させており、今は１７０人の学習者で大盛況です。設立当初２６人だった会員は、現在５００名近くにまで拡大していますが、会の発展の「根っこ」にあるのは、友好クラブ時代から続いている、市民の草の根の「友好魂」です。

設立２年後に与えられた「専用室」は、市庁舎の片隅の６畳間くらいの部屋でした。私が所属した広報部は編集会議をする場所もなく、市庁舎地下の職員用の畳部屋を使わせてもらったのを懐かしく思い出します。長く現場を支えてくださっている皆さんの中には、今も現役で日本語のボランティア教師をしながら、後進の育成をされています。本当に頭の下がる思いですが、古いメンバーと会うたびに「お互いに年をとったねえ・・」と話題になることが多くなりました。組織の若返り、新陳代謝も大切ですが、そのためにも市民の皆さんが信頼を寄せてくれる新しい「看板」も必要になってきました。

会の規模が拡大する段階で法人化が検討課題となり、中長期の事業計画の中でも度々議論されてきました。実現に３２年を要したのは、現場のレベルでは特段の不自由なく活動できていることと、市から更なる「自立」を促されることに対する一抹の不安でした。いろいろな体制が整いいよいよ本格的に法人化へ進もうと考えていた矢先に、新型コロナに襲われ、それも痛手かと思いましたが、ここでも「友好魂」が遺憾なく発揮され、活動を停滞させることなく乗り越えることができました。フェイスシールドをして日本語を教えるボランティアの勇ましい姿には、感動さえ覚えました。

法人化はプロジェクトを作り、１年がかりで検討を重ねました。できるだけお金をかけずスムースに移行することが課題でしたが、本や資料と格闘しながら何とか準備をすすめることができました。本年５月に開催された創立総会では、９割以上の会員が投票に参加し、全員の賛同を得て一般社団法人 多摩市国際交流センターのスタートをきることができました。

本の表紙だけが変わっても、中身が同じでは意味がありません。この先真の法人として認められるためにはまだまだ努力も必要です。

大昔の話になってしまいましたが、上京し社会人となり、初めて背広を着て出勤した時のことを思い出します。新調した背広を着ると、何故か背筋が伸び視界が広がる、この背広に相応しい人間になりたいと誓う。法人化で一番大切なのは、そのことかもしれません。TNVN の皆様とも連携を深めながら、日本語教育にも一層の磨きをかけていきたく、今後ともよろしくお願いいたします。

日本語の教育・支援　変わったものと変わらないもの

日本語教師 **金子 広幸**

今回は、今まで私たちが通ってきた日本語関連の道を少し遠くから眺めてみることにします。（あくまでも個人の見解です。より詳しく知りたい方は、研究者や統計の成果に注目してください）

いくつか項目を分けて見ていくと、

まず、**①教え方**。

30 年以上前、私のクラスの様子だとしっかり導入して、日本語で日本語を教えるその導入が終わったら、口慣らしの練習から何から全部、教師がお膳立てしていて、ロールプレイから何から手取り足取り「指導」していました。まるでテレビショーでした。

でも、実は最近は、

的確な訳語が付いている教科書が出回っていたり、スマホをかざせば Google さんが翻訳してくれたりと、教師が登場して説明する場面が少なくなり、確認のあと、便利な固定表現をいくつか練習して、

後は「自分の状況の中でどのように組み込んで使っていくか」を、学習者同士で編み出し、クラスの中で発表したり、実際の場面に出かけていって使ってみたり…というような方法が見られるようになりました。

今でも日本語学校等では古いやり方が使われているところもあり、それは地域の日本語支援の教室などでも同じで、そのバラエティの幅の広さに戸惑う人も多いのでしょう、講演で伺った時など、「一体どうしたらいいのか」と質問を受けることも増えました。

②学習者側が習う方法もまた大きく変わりました。単語を覚えたり、文法を身に付けたりするよりも、目標の言語で何かのアウトプットができるように、学習者自身が自己実現の道を細かく考えるようになりました。昔と違って、日本にいてもいなくても、オンラインなどで動画などの情報は簡単に見られるようになりましたから、その分情報量が多くて、想定しやすくなったのだなと思います。

私のクラスでも、グループ発表してもらうときなど、有名なドラマやアニメのシーンをそのまま再現して発表することにチャレンジしたところもありました。

そして**③期間**です。

以前の号にも書きましたが、大学など高等教育機関に進学するためには、日本語学校で 2 年ほどの長いカリキュラムに従って、その成果を得てから大学の試験を受ける人が多かったのですが、最近はそれが短くなって、ある程度勉強してから日本に来る人が増えましたし、基礎は母国で学習し、一部オンラインで日本の学校のクラスに参加して、レベルが安定してくると、交換留学生として、半年ほど日本にいるなど、その期間がフレキシブルになってきました。

④ツール

勉強するときに使う道具は、昔は本とノートだったのに、あっという間にパソコンやスマホ、オンライン上のソフト等が普段の学習活動を支えてくれるようになりました。私のクラスでも、読解教材でも試験でも、オンライン上のソフトを使うようになりました。発音チェックの課題では、自分で録音を作って提出する課題を出すようにもなりました。学習者自身が選んだ原稿を、AI が読んでくれて、それを手本に学習者が自分で録音を取り、どのくらい上手に読めているかを教師が聞く課題です。

⑤来日する学生たちの背景が変わりました。

日本に進学目的で来る人よりも、働く人、その家族の割合が増えました。中級レベルの日本語学習が終わると、「ゲンバ」に出て行く日本語学習者たちも増えました。

国によっては、昔は苦学生の来日が多かったのに、経済的に安定したあとは、びっくりするほどお金持ちになってきた学生たちや、戦乱が続く国から来る人たちも増えました。

円安に後押しされて、日本に来るインバウンドは、数が増えた割には、短い期間でも日本にいて、日本語学校などで日本語を習ったり、地域の日本語支援の場所で支援を受けながら日本語を練習したりする人はあまり聞きません。むしろ、上に述べた機器類を使って意思疎通できるようになるなど、日本側の受け入れ体制が整ったようで、短期滞在者は日本語を使わなくてもよくなりました。

以上のように、学習者の背景の割合は変わったものの、とりあえず日本語の学習を始めた、各々の人の目指すものは

変わっていません。基本的に自己実現がゴールですから。

ちょっと横道にそれて…
日本社会が日本語教育や日本語支援を見る目は大きく変わりました。
そして、現場で活動されている方も、その状況の目まぐるしさについていけなくなっていることもあるのではないでしょうか。
地域支援の皆様は、「教える・教えない」・「導く・寄り添う」、「日本語学校・大学・地域などどの連携」など、さまざまな模索が続いていますね。

日本語教師を囲む社会は、これまた大きく変わりました。去年の秋には日本語教員試験が国家試験の 1 つとしてできましたね。今はまだ日本語学校や大学の別科などで教える人が対象なのですが、やがては日本語に携わる多くの人がこの試験を受けるようになるかもしれません。

学習者の話に戻りましょう。
今まで変化を見てきたのですが、ここから先は今何が必要かを考えます。日本語教師の私も支援者の皆さんと同じ立場から見て、学習者に対して必要なことは何かです。

最近「大丈夫なんだろうか？」と思ってしまうことがあります。大学院入試など、ずいぶんと高度なことにチャレンジしている人でも、話を聞いたり、書いたものを見たりすると、初級の文法がわかっていない人もいるんです。
「まず文法やってね」と言うこともありますが、果たしてそれはその学習者にとって真に必要なことかと後で思い返すこともあります。自己実現が先立って、学習として積み上げていくものへの注目が薄れてきているのかもしれませんね。

それでも、やっぱり揺るがせてならないのは、**学習者の自己実現**です。

「自分がどの場所で誰に対して何をするか」を、学習者自身にも見つめてもらって、できるだけ遠回りすることなく、その場で的確な表現や言葉の使い方や聞き方、受け取り方を学んでもらうことが、日本語教育に携わる者としても、地域の支援に携わる皆様にとっても、最大の命題になるのではないでしょうか。

となると、背景の異なる学習者が一緒に学んでいるのは、非効率になるのかな？と思うこともあります。早くから自己実現の道に行けるよう、学習者個人のゴールを意識し続けて、応援することが近道になるのでしょう。

私の周りには V さんと言う学生がいます。この V さんは私と上手に交わりながら、自分で問題をどんどん解決して、自己分析して、自分の身の上に日本語を打ち立てていくタイプの人です。
また、このVさんと正反対のタイプの人もいて、教師が何かを出さないと行動が取れない人もいるんです。
(この辺の差は、文化背景や出身国で受けてきた教育のシステム、また家庭での教育、その人自身の性癖・性格にも多く関わることになると思うのですが)個人が一人一人違う以上、求めているものが違い、自己実現の理想も全部違うので、私はどのように合わせていったらいいのかとハタと考え込んでしまうこともあります。

それでも、一定の期間が終わって、これでしばらく会えなくなるんだなぁと思うと、急に胸キュン❤。「この後この人はどうなっていくのかなあ」といつも心配します。
(不思議ですよね、教師って。クラスが始まって、その学生達と知り合いになって、名前と顔が一致すると、もうその人自身の将来のことや、出身国の社会体制や世界をめぐる情勢、日本との関係などをちゃんと心配し始めたりするんです。)
教師になりたての頃、私は教師の仕事では「待つことが一番大切だ」と先輩の教師に習いました。でも今はそれより「学習者の心配を上手に幅広くすること」かもしれないと考えます。

ここまで「変わりました！」ということばかりお話ししてきましたが、よく考えたら全く変わってないものが 2 つありました。
日本語学習している人の私たちへの感謝の気持ちと、熱意です。そしてその感謝を受けつつ、熱意を支える、日本語教師と地域支援の皆様です。その需要は今もこれからもあり続けることでしょう。それを忘れてはいけませんね。

『きいてまねしてはなしてーわたしたちが語る「20 のエピソード」―』の活用

https://www.pref.osaka.lg.jp/o180090/chikikyoiku/osyaberi/manesite.html　大阪府教育委員会編

にほんごの会くれよん　茂木真理

公益財団法人 目黒区国際交流協会　北爪淑乃

自分のことが話せるように・・・を目標に！

このテキストとはコロナ禍の 2021 年 2 月、サポート 21 主催のオンライン日本語活用講座で出会いました。

収められた 20 のエピソードの語り文を何度もきいて、まね（リピート）して、それをモデルとして話し方を練習することで自分語りができるようになるという地域日本語教室のための教材でした。マスターテクスト・アプローチが取り入れられていました。特徴は、3 点。

・学習者は負担なく入門期に必要な語彙や表現が学べる
・イラストを活用することにより、説明がいらない
・テーマや場面を軸に生活に必要な日本語を学べる

⇒自分のことが話せるようになる・オンラインでも使える・テキストが無償

とても興味をそそられ、実践してみたいと強く思いました。幸運なことに、実践の機会はすぐにやってきました。目黒区国際交流協会（以下 MIFA）のオンライン入門・初級者クラス開設計画と繋がったのです。

以下、実施担当　北爪さんよりの報告です。

MIFA での実践

開設から現在までのあゆみ

MIFA では、近隣日本語教室がコロナ過中活動休止になったことに伴い、初級・入門クラスを 2021 年 6 月にオンラインで開設しました。

テキストとの出会いは、目黒区日本語教室連絡会内でのことでした。テキストが手法とする「聞く→まねる→話す」が新しい言語を習得する上で最も自然な順序であると示す点に深く共感したことが導入する決め手となりました。

クラスは「はじめようにほんご」という名称で、各ターム約 3 か月を年に 3 回開催しています。
1 ターム学習者 40 名程度、支援者 28 名程度が参加し、午前/午後の回を設け、原則的に 1 対 1 で同じペアにて学習を進めています。

支援者にとっての利点は、経験のレベルを問わずすぐに始められることです。従って、資格を取得して間もない方、または勉強中の方にも活動に参加していただいてます。一方、ご経験のある支援者には、これまでの教授法とは別物と捉え、新たな目で支援に関わっていただき、レッスン後は毎回 30 分程度支援者同士の共有時間を設けております。このクラスでは、学習者と対等な立場で相互理解を深めることを基本理念とし、やさしい日本語を使用しながら、学習者のニーズに応える学習法を取り入れ、進度も個々のペースに沿って優先度を決めています。

実施者としてのまとめ

このテキストを使用する学習者は、視覚と聴覚で取り入れたことを繰り返すことによって音を身体に染み込ませ、頭で考えるよりも自然に自らの音で発することを学んでいることが分かります。しかし、論理的思考の強い一部の学習者には、このメソッドが合わない場合もあるため、学習を始める時点で十分に話し合い学習方法を検討する必要があると考えます。

伝え方はシンプル・・・学習者にも支援者にも使いやすく、魅力的

自分のことを日本語で語れるようになる喜びは何にもまして学習者、支援者双方にとって大きな魅力になっていると思います。

参考：
マスターテクスト・アプローチを取り入れたパートの２の手順は７つ

学習者・支援者の声

左の QR コードより学習者からの回答一覧をご参照いただけます。
https://docs.google.com/spreadsheets/d/1QWZDcsPUt5gpR235npBc2P64j-Jvr40ZoJclRyp1zLo/edit?usp=drivesdk

左の QR コードより支援者からの回答一覧をご参照いただけます。
https://docs.google.com/spreadsheets/d/1KIWIsWZrwcmBwUWKN_3sA8IOtLUxrTr8X_PNELfNA4/edit?usp=drivesdk

nice to meet you

『日本語レッスン＠Home』

しば日本語クラブ水曜クラス（港区）

木野博美（広報担当）

しば日本語クラブは、2017 年以来「NPO 法人・新現役ネット」のもとで活動を続けてきましたが、昨年同法人が解散したことに伴い、2024 年 10 月に任意団体として再スタートしました。

しば日本語クラブ水曜クラスの特徴は：

①オンラインレッスンを主体としていること。これは、コロナ禍が始まった時からです。

②原則として、1 対 1 のマンツーマンのレッスンであること。

③ビジネス・パーソンや大学院生を指導の対象としていること。

レッスンの回数と陣容は：

毎週水曜日夜のオンラインレッスンがメインですが、都合の悪い学習者のために別の日にサテライトレッスンをしています。

対面で会話の練習をしたい学習者には月に一度土曜日に会話サロンとランチ会を開いています。

・在籍している指導者は 15 名、学習者はアジア・ヨーロッパ・中東・アフリカから 30 名です。

イベントの集い：

「日本の社会・文化・歴史を体験してもらう」ために年に 1 ～ 2 回イベントを行っています。

・昨年は神田明神でご昇殿祈祷と神田囃を体験してもらいました。

・今年 4 月には川崎市宿河原沿いの二ヶ領用水路のお花見ウォーキングとランチ会を開催。

・9 月には「矢来能楽堂」での能楽鑑賞・能楽体験を企画中です。

ビジネス・パーソンがお相手というと、なんだか難しく固そうですが、私たちは、自身の社会経験、日常の暮らしなどを、会話やイベントを通して知ってもらうことをモットーとしているだけです。

マンツーマンレッスンを原則としているので、若輩の私自身「教え方はこれで良いのか?」不安になることもあります。そんな時は

グループメールで相談すれば皆さん快く、あれやこれやと体験知識や資料を惜しみなくシェアしてくれます。

そして、この優しさと温かい雰囲気が自然と学習者へも伝わっているように感じます。帰国されたあともオンラインで海外から参加をされている方もいます。

私自身、指導者として約一年半が経ちました。「教えながら教わる」という気づきがたくさんこぼれる程にあります。言葉や表現がしっかりと伝えられ、学習者の方が日常の出来事を丁寧に話せたときは心から嬉しくなります。逆に、学習者から学ぶことも多く、改めて日本の良さを再認識させられることもたびたびあります。

指導者の年齢層はやや高めですが(笑)、お互いに協力・助け合いながら一緒に学び成長できるボランティアクラブです。

どうぞお気軽にお問合せください。お待ちしています。

nice to meet you

奈良のボランティア日本語教室から（奈良市）

神　歩（個人協力会員）

奈良市に移住してあっという間に 1 年数ヵ月が過ぎました。引越し荷物の片付けも一段落した昨年 6 月から、「ネットワークいこま・日本語の会」に参加させていただき日本語ボランティア活動を再開しました。TNVN のネットワークニュースに何で奈良の教室が？と疑問に思われる読者もいらっしゃると思いますが、東京を離れるまで TNVN 事務局のお手伝いをしていたご縁で、今回奈良の教室をご紹介させていただきます。

私が調べた限り、奈良県や奈良市や生駒市には TNVN のようなネットワーク組織はないようです。奈良県のホームページには奈良市で 5 教室、生駒市で 4 教室が日本語教室として載っています。全てがボランティア日本語教室かどうか定かではありませんが、日本語学校は含まれていないようです。

私が参加している「ネットワークいこま・日本語の会」は、奈良先端科学技術大学院大学で学ぶ留学生や研究生の日本語学習支援のため、1998 年 4 月に設立されました。教室は同大学構内と近鉄生駒駅に接した“たけまるホール”の二ヶ所に分かれています。

大学構内の教室は毎週火曜（18 時 30 分～20 時 00 分）と土曜（10 時 30 分～12 時 00 分）に留学生・研究生を対象に活動しており、入門レベルから中上級レベルまで 5 段階に分けて学習支援しています。学習者数は延べ 100 名、国籍はアジア諸国、ヨーロッパ、アメリカなどバラエティ豊かです。

“たけまるホール”の教室は毎週木曜日の 17 時からと 18 時半からの二回に分けて支援しています。学習者は大学院大学の留学生・研究生に加え、日本人と結婚して日本に住むことになった人や日本

で起業した人、技能実習生など様々です。国籍はイギリス、フランス、インドネシア、台湾、中国など、こちらもバラエティ豊かです。

学習者の学習目的は「日本語能力試験合格」「職場で必要」「日本企業に就職したい」「近所の人たちと話が通じるように」などさまざまですが、学習者はとても熱心に楽しく取り組んでいます。

全部で 14 人のボランティアで支援していますが、ボランティアが慢性的に不足しているのが現状です。

東京日本語
ボランティア・ネットワーク
事務局

column

“対話型 AI をもっと身近に

3 回連続で AI に関する話題となりますが、旬なトピックであり、ぜひ多くの方にいち早くボランティアの現場でも活用していただきたいと思い、今回も取り上げることにしました。今回は、「対話型 AI」と呼ばれる “ChatGPT” や “Copilot”、“Gemini” などについてご紹介いたします。

これらの AI は「対話型」と呼ばれており、テキストで AI に質問をすることで利用します。最近私が出会った日本の大学に通う中国人留学生のケースでは、AI にこのように尋ねていました。

「先生に今日の講義で分からなかったことを質問したいけど、どういうふうに日本語でメールを書けばいいでしょうか？」と中国語で質問すると、AI からは以下のような丁寧なメール文が提案されました。

「〇〇先生
お世話になっております。〇〇学部〇〇学科の（あなたの名前）です。
本日の講義で、〇〇の部分について理解が難しかったため、ご質問させていただきたくご連絡いたしました。お忙しいところ恐縮ですが、以下の点についてご教示いただけますと幸いです。

（質問）

お手すきの際にご確認いただけますと幸いです。
どうぞよろしくお願いいたします。」

今までであれば、分からないことを Web でキーワード検索していたような場面でも、AI を使えば瞬時に適切な表現や解決策を得ることができます。

私が 15 年ほど前にボランティアを始めた頃は、紙の辞書を使っていましたが、今ではスマートフォンでの検索が主流になりました。それと同じように、あと数か月もすれば、対話型 AI などのツールが一般的になることでしょう。

決して難しいことではありません。まずは、ご自身のスマートフォンやパソコンにいずれかの対話型 AI ツールをインストールし、気軽に使い始めてみてください。

（文責：西堀）

～編集後記～

わたしたちの「東京日本語ボランティア・ネットワーク」

創立から 30 年余り。今更ながら、何と良いネーミングだろう、と思うこの頃です。「ボランティア」というのは、自分の意志で、自主的にすること。とは言え、日々の変化に、皆さんはどうしているのか、これはどういうことなのか、そんな相談や情報交換ができるのが「ネットワーク」です。

私たちの編集会議は先ず、最近気になったことの「おしゃべり」に始まり、このネットワークを使って、「知りたいこと」を教えてくださる方を探します。

今号の『日本語教育機関認定法施行後の現状』も、『法人化への道のり』も、「どういうことなのか、どなたか教えていただけませんか？」に始まり、この紙面に掲載させていただく運びとなりました。 皆さんの「気になること」も、どうぞ編集委員にお寄せください。

（文責：仁村）

東京日本語ボランティア・ネットワーク（TNVN）は都内のボランティア日本語教室のネットワークで、会員からいただく会費で運営している民間の団体です。会員は日本語学習支援活動を通して、言葉のため日常生活に不自由を感じている外国人を、隣人として支援しています。又、TNVN は会員への情報提供・会員相互の情報交換、および外部との情報受発信を行い、活動の活性化を図ります。

東京日本語ボランティア・ネットワーク事務局の活動

◆日本語ボランティア相談窓口
日本語ボランティアの活動についてのご相談・ご質問にベテランスタッフがお応えします。メールでお問合わせください。

＊対面でのご相談にもお応えします。
ご希望の方は、以下メールで御予約の上、おいでください。

場所：東京ボランティア・市民活動センター
ＪＲ、地下鉄（東西線・有楽町線・南北線・大江戸線―出口 B2b）
飯田橋駅下車
セントラルプラザ 10F ロビー

◆郵送先
〒162-0823
東京都新宿区神楽河岸 1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックス No.4

◆**E-mail**： office@tnvn.jp
◆ホームページ： https://www.tnvn.jp
◆郵便払込
口座番号 ：00100-1-719259
加入者名：東京日本語ボランティア・ネットワーク

◆**会員**（2025年7月31日現在）
正会員：81団体
個人協力会員：16名
賛助会員：4団体

◆**編集**／岡田美奈子、鈴木恵司、西堀孝文
仁村議子、山内眞理、山形美保子

「感想を是非、お寄せください」

125 号アンケート

https://forms.gle/FkfXsgSjzWo5z4Dw9